

普段はこんな感じのダンナ



# 舞台好き ファイナンシャル ランナーの 楽屋裏通信

## 雷オヤジとの関係が変わったあるきっかけとは

「家一軒あげるから、診療のために移住してこないか？」とか「この助産院を継いで開業しない？」とか医院経営している側からお誘いの声がか色々あったのにもかかわらず、開業してこなかったダンナ。

それが、いよいよ満を持して開業の運びになりました。

今回は、11月23日（祝）に「にしむら漢方内科クリニック」を開業する私のダンナである西村史朋（ふみとも）医師にインタビューをしました。

もしかしたら傍からみれば順調な運びに見えるかもしれませんが、6年ほど前はK病院にて夜勤と長時間勤務などの激務のため働けなくなり、精神疾患で労災認定を受けるような状態でした。

また、家庭でも家族に些細なことで突然激高し（主に被害者わたし）、昼間も寝ている、いくら寝てもしんどい、食べられないなどなど、ゾンビ状態でありました。



（特に「電気がつけっぱなしでダンナブチ切れ事件」や、「スープが土の味事件」は個人的に忘れられない事件です。詳細が気になる人は私まで(笑)

毎日が臨戦態勢、空気がピリピリしていたので、夫婦関係も最悪。離婚秒読み段階であったこともありました。）

今回のクリニックはそんなゾンビ前、ゾンビ中、ゾンビ後のダンナを気にかけて、ずっと見守って下さっていたある社長さんの後押しで、「いつまでも人の軒先借りているのでなく、そろそろ独立したらどう？」と応援のお声がかかり、開業にいたりました。